

# やまと 民俗への招待

鹿谷 熊

奈良女子高等師範学校教授の佐藤小吉は、大正時代に県史蹟勝地調査会委員として十三塚を調査したが、その報告を『奈良県史蹟勝地調査報告書第七回』(1920年刊)に載せている。同氏は戦国時代の戦死者を、主人を中心に入葬したものかと推測したが、今後の発掘調

## 満を持し十三塚発掘

査に期待を寄せていた。

その後、土地所有者が変わったことから、1932年に急に発掘調査が現実味を帯びてきた。十三塚は大阪の商事会社所石はすぐに奈良県史蹟

に帰した。同氏は知人で土佐史談会長などを務めた寺石正路に発掘の話を持ちかけた。十三塚を踏査したことがある寺

り、中尾も県社寺課に出向いて、ついに国の許可も得て、翌33年2月25日から佐藤教授が主任、津田辰三県属が担当となり開いたが、出土品はな

く、第一、第三陪塚を掘るも何も出ない。第四陪塚から、高坏の破片一つが出ただけで、一同は不審かつ失望の思いで一日の作業を終えた。翌26日は、さすがに陪塚発掘を



1933 (昭和8) 年の十三塚発掘を伝える新聞各紙  
(『生駒十三峠の十三塚』より)

掘つてはみたが  
當が外れた

集る興味

になつた。

行つたが、出土品はなく、

いよいよ午後から主塚が掘られた。作業員4人で、

深さ2・5m、幅0・8

m幅で十字に掘り下げた

ところ、表土に寛永通宝

などがあったのと、中央

部1m下から弥生玉器の

破片数点が出たのみで、

他に何も出なかつた。そ

こで発掘の標識を主塚に

埋め、午後4時ごろ作業

を終えた。

この発掘調査は土地所有者の懇望によって、

経費負担もして行われ、

結果の公式報告は特に

ないようである。以上は、

当時の新聞と寺石正路や

大和の考古学者の島本

一の見学記を基に記し

たものだが、その内容に

は異同がある。この後十

三塚は古墳ではなく、

民間信仰上の塚であろ

うとされて、関心は急速

に衰えていった。

表)  
(奈良民俗文化研究所代

次回は21日